●〈症例〉

小腸内視鏡にて診断し得た 小腸クローン病の1例

四元真由子 前澤 寧 山田郁絵 龍 貴裕
蓮見 桂三 小野弘二 大野 隆

伊勢原協同病院／消化器内科

〔Key Words〕小腸内視鏡，クローン病

和文要旨

症例：25歳男性。血便，下痢，腹痛を主訴に当院受診。血液検査上貧血と低栄養を認め，直腸診にて血便を認めたため入院となった。腹部CT，上部下部内視鏡，小腸造影にて有意な所見なし。小腸疾患を否定できず小腸内視鏡を施行したところ，小腸の一部に縦列する小潰瘍を認め，病理所見と合わせて小腸クローン病と診断した。従来の検査で診断が難しい消化管出血の診断に小腸内視鏡検査は有用であると考えられた。

はじめに

従来小腸疾患の精密検査には小腸造影が用いられてきたが，微小病変は造影検査では指摘できず確定診断を得られずに原因不明とされる症例が少なからず存在した。今回我々は小腸造影検査で指摘できなかった微小な小腸病変を認めた小腸クローン病を小腸内視鏡で診断し得たので報告する。

症 例

患者：25歳，男性。

主訴：血便，下痢，腹痛。

既往歴：16歳時からてんかんでバルプロ酸を内服中。20歳頃から貧血を指摘されている。

現病歴：2008年3月中旬から黒色便，発熱を認めていた。2008年3月23日外出時にはふらつきのため家人に迎えに来てもらった。翌日午前9時頃，血便を主訴に当院を受診し，直腸診で血便を認めたため同日入院となった。

入院時現症：身長177.5cm。体重57.4kg。BMI 18.2。体温37.1℃。HR 97/分。顔面蒼白。眼瞼結膜貧血様。腸蠕動音軽度亢進。左側腹部～左下腹部及び右下腹部に圧痛あり。

入院時検査所見：Hb 9.7g/dl，TP 5.4g/dl，Alb 3.3g/dlで貧血と低栄養が見られた。白血球，CRPは正

常値であった。腹部CT，上部下部内視鏡，小腸造影で有意な所見が得られず，シングルバルーン小腸内視鏡を施行した。経口的なアプローチでは，空腸の壁上に縦列する小潰瘍を認め(Color 1, 2)，同部位より生検を施行した。さらにスコープを肛門側へ進め，点墨でマーキングをして終了，1週間後に経肛門的なアプローチにより施行した。点墨部位を越えて，前回生検を施行した病変に到達し再度生検を施行した。病理組織上，小腸の絨毛粘膜に好酸球，形質細胞，リンパ球を含む炎症細胞浸潤および所々に局所的な線維化が認められた。粘膜固有層内には肉芽腫部分が認められ，クローン病として矛盾しない所見が得られた(Fig. 1)。患者は痩せ型，若年で以前から下痢が多く，来院時には微熱と腹痛，大量の血便を認めていた。貧血と低栄養も見られ，臨床経過ではクローン病が疑われた。小腸内視鏡はクローン病の典型的像ではないものの，小潰瘍が縦列しており，病理所見と臨床経過を総合的に判断してクローン病と診断し5-ASA 2,250mg/day投与を開始した。開始後は腹部所見消失し，2008年10月6日には体重63.1kg，BMI 20.0，Hb 15.3g/dl，TP 7.5g/dl，Alb 4.1g/dlと貧血と低栄養が著明に改善し経過良好である。

考 察

クローン病は小腸のみに病変を認めるものが全体の60～66%と言われており，小腸精査は必須の検査である。従来から小腸精査には小腸造影が行われており，クローン病で見られるアフタ様潰瘍，不整形潰瘍，縦走潰瘍，敷石様外観，狭窄，瘻孔などの所見も小腸造影で描出可能である。しかし小腸造影では微細な病変の描出は困難であり，中には原因不明と扱われていた小腸出血も存在し，小腸クローン病を見落とされた症例も存在すると考えられる。近年小腸内視鏡の普及により小腸病変の精査が可能になり，本症例のように微細な病変で従来では原因不明と判断されたであろう症例でも確定診断が得られるようになりつつある¹⁾。小腸出血精査にはカプセル内視鏡も有用と言われているが，明らかな消化管の狭窄症状がなく小腸造影検査でも狭窄が見られない場合でもカプセルの滞留が起こりうる²⁾と報告されており²⁾，本例では当初よりクローン病を疑っていたため小腸内視鏡を第一選択とした。結果的に病変が極微小であったため内視鏡での詳細な観察と組織生検が診断には有用であった。本症例では小潰瘍が出血の原因に，またクローン病の小腸病変と成りえるかや疑問があったが，全消化管を検査して出血部位はその潰瘍しかないこと，さらに5-ASAの加療にて身体所見や検査成績の著明な改善を認めており小腸クローン病に伴った変化として矛盾しないと判断された。

Fig. 1 (a) HE staining $\times 12.5$ (b) HE staining $\times 100$
Pathological finding showed granuloma (arrow).

文 献

- 1) 長坂光夫, 平田一郎, 高濱和也, 他. Crohn病に対する小腸内視鏡の有用性. 胃と腸, 41: 1649—1659, 2006.
- 2) 大宮直木, 荒川大吾, 中村正直, 他. Crohn病に対する小腸内視鏡の有用性. 胃と腸, 41: 1661—1667, 2006.
〈カラーは8頁に掲載〉

A case of Crohn's disease of the small intestine diagnosed by single balloon enteroscope

Mayuko Yotsumoto	Yasushi Maesawa
Ikue Yamada	Takahiro Ryu
Keizo Hasumi	Koji Ono
Takashi Ohno	

Department of Gastroenterology, Isehara Kyodo Hospital.